

グレーゾーンに対して語るには 愛しかない

樋野興夫著

いい覚悟で生きるより

問題の解決には至らなくても、不安が解消されることは、
足下を照らす懐中電灯を得たような思いになります。

そもそも人間は、黒白はっきりした世界に生きているわけではありません。なぜに自分という存在があるのか、なぜ今日も生きているのか、つきつめても答えが出るものではありません。

いい悪いで線引きができないもの。それは、いわゆるグレーゾーンです。

なぜ病気になったのか、なぜがんになったのか、なぜ障がいがあり生まれてきたのか。これらもグレーゾーンではありませんか。雪山で遭難したから凍傷になった、熱湯をかぶったからやけどをしたというような因果関係がはっきりしているものと異なり、なぜかわからないけれど、こうなってしまった、という線引きのできないグレーゾーンで多くの人がみんな悩んでいるのです。

グレーゾーンという言葉、私が実感としてとらえるようになったのは、東日本大震災と原発事故を経験した福島県でのがん哲学外来の学びからです。

訪れる患者さんの多くが、Aという医師からはこう言われ、Bという医師からはこう言われ、Cという病院ではこう言われました、いったい私はどうなっているのでしょうか、と訴えます。それを聞きながら私は、どの医師の見解も間違いではない、しかし絶対でもない、つまりグレーゾーンなのだ理解したのです。

あいまいなことはあいまいに答えることが科学的である、と習ってきた私たち現代の医学者ですが、福島原発の事故以後、もうそれではすまされなくなっていると感じています。しかし、グレーゾーンを語るには理論や科学は通じません。

では、どうすればいいのか。

「グレーゾーンに対して確信を持って語るには、愛しかありません」

口をついて出た言葉はこれでした。

つまり、がんの専門性と哲学的な見地から考えると、福島の患者さんの悩みは、診断の正解がわからないこと以上に、「正解がないグレーゾーン」という事実を踏み込んで話してくれない不安のほうが大きいと感じたのです。

考えてみれば、人生も世の中のさまざまな現象も、グレーゾーンだらけです。足下を照らす懐中電灯を得たかのように、その悩みを対話で解消し、その人なりの「いい覚悟」を持てるようにしてあげたい。その思いを支えるのは、間違いなく愛です。

